
平和な翼

南里 こなみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平和な翼

【Zコード】

Z4723Z

【作者名】

南里 こなみ

【あらすじ】

主人公の少女が自分のことを思い出すために旅を始める。
魔法が織り成す不思議な物語。

未熟なので亀更新間違いなしですが、よかつたら見てください！

0、プロローグ

ここはドラゴンという生き物が生息し、魔法という不思議な力を使う世界。魔法を使い、ドラゴンと共に、戦いを繰り返す。火種は消えず1つの国以外のすべての国で争いが絶えない。

唯一の平和な国。その国名は「ルナミ・シー」。

別名 ウィンドピース。平和な翼。その由来は、平和で国の形が翼に似ているということからだつた。

全ての国で争いが後を絶たないというのに真ん中に位置するこの国は、どんな戦争にも中立の立場を決して崩さなかつた。そして戦いを仕掛けられても、大きな争いにならざ人も死なないような小さな争いになる。それは仕掛けたほうも同じで、いつしか話し合いで解決してしまうほど小規模な争いといえるのかも分からぬ争い。平和という言葉が一番似合う国。

まるで、翼の形をした国 자체がそう望んでいるかのようにその国に…地に足を踏み入れた者は戦意がいつしか消えていく…。

それほど平和で…のどかな国…。

「いつか自分の国も…」…そう願つてしまふほど平和なそこは訪れる人の心をいつの間にか癒すのだ…。

そこが「ルナミ・シー」だつた。

『ルナミ・シー』

そこは、世界の中でもっとも平和な国。そして、もっとも優しい国と呼ばれていた。

だが、それは昔の話。昔は、『月』を『夜の守護神』、『太陽』を『朝の守護神』として大切にしていた。だが、『ルナミ・シー』の住人もやはり人間。いつしか人々の考え方も変わり始めた。『人が神』と考え始める者が始めたのだ。

その頃から『ルナミ・シー』の中でも小さな争いが起ころり始めた。

そして、強大な魔力を持つ者が次々と平和を望む『ルナミ・シー』から世界に行くことになった。世界は、大混乱に陥った。

そんな中、『ルナミ・シー』ではもつとも魔力が強い神子族と呼ばれる一族が世界の混乱を収めるため動き出した。神子族は『ルナミ・シー』に最初からいた人間の末裔で、『ルナミ・シー』の大半にこの一族の血が流れている。そのため、『ルナミ・シー』の人間はかなりの力を持っていた。

しかし、強大な魔力を持つ神子族達も普通の人でも同じ血を継いでおり、なおかつその中でもかなりの力を持つ者たちを前に、なす術が無かつた。そして、強大な魔力を持つ人間たちはその醜い心で次々と争いを仕掛けたのだった。しかし、そこにある者たちが現れた。その者たちは決して名を名乗らなかつた。ただ、自らのことを“シンウイスト”ルナミ・シーの言葉で『守護神らの加護を得た者』とだけ名乗り、戦いを止めるべく魔力を使つた。その力は絶大だった。しかし、その力をもつてしても倒すことは出来なかつた。争いに捕らわれた人は、もはや人ではなかつたのだ。

人の形をしていても、心や力は悪魔のそれだつた。さすがの『シンウイスト』でも倒せない：そこで、倒すではなく、生きたまま封印 という方法で一応倒すことが出来たのだった。そして、その日から『シンウイスト』は『眞の神子』と呼ばれ『月』『太陽』と共に世界の人々から称えられたのだった。

それは、今から100年以上前の話。

今でも、世界では昔ほどではないものの争いが絶えなかつた…。

0、プロローグ（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます。
随分前に考えた話なので矛盾なども出でるとは思いますが、どうぞよろしくお願いします。

1、自分の道と夢

快晴という言葉が一番似合う朝のことだった。「ソラリア・ワール」のジール大都市から少し離れたカーリアという町の、ある学校で卒業式が行われた。

世界一般的に、6歳から15歳までの9年間学校に通わなければいけないことになっている。そして学校を卒業したら、職に就いたり、勉学に励んだりと人それぞれの道を歩んでいくことになる。つまり、学校を卒業したら一般的に大人ということなのだ。

因みに国を出るのも保護者の了承なしで出られたり出来るようになる。そのため、家出する者が後をたたないんだとか…。

そして、卒業式が行われた次の日、一人の少女がカーリア駅の鉄道列車に乗つてこの国を旅立とうとしていた。

その少女の名前は「愛里 優月」。15歳の大人になつたばかりの女の子だ。

彼女は普段「ソラ・シーク」と名乗つてゐる。この「ソラリア・ワール」では、「愛里 優月」の名前は目立つてしまつからだ。

この国は、カタカナの名前の人が多く、大都市にはそれなりにいるものの少し離れているカーリアでは、漢字の名前を持つ者はないに等しい。そのため、優月は悪目立ちしないために本名ではなくこの国でもおかしくない名前を作つてもらい、名乗つてゐる。

優月は最初一人ではなくある人と共にこの町に來た。その人は、40代くらいの初老のおじさんで、優月が6歳ぐらいだった。しかし、気が付けば一人になつていて。そして、小さいころの記憶もあやふやになつていつた。今、優月が昔のこと覚えていてることといえば、自分の名前と誰かと一緒に習つた魔力の使い方と体術だけだ。誰に習つたのかも覚えていない。

そんなこんなで、優月がこの町に來てから約9年がたつた。そして、

今旅が始まるうとしていたのだった。

・・・

「何処行きの切符をお求めですか？」

ぱーっと空に伸びる煙を眺めていた優月は、駅員の問いかけにはつと我に返った。機関車特有のその煙が風に遊ばれてゆらゆらと空に伸びる様は、見ていて飽きないのだ。

いつの間にか、前に並んで駅員に文句を言いながら切符を買っていた初老の男性がいなくついている。駅員が少し疲れた顔をしているのを見ると先程までいたようだ。その様子に優月は少し苦笑しながら考えた。

「…えっと…『ノルソーグ』まで。」

優しい雰囲気を持っている若い駅員は優月の言葉に少し難しい顔をした。

「…『ノルソーグ』行きですか？…確か…。」

そう言うと、駅員は隣においてあつたパソコンのキーボードを、力々カタと弾き出した。優月は一連の動作を不思議そうに見つめる。

「…ああ、やっぱり…。」

そう呟くと、駅員が顔を上げる。その顔は少し申し訳なさそうな顔をしていた。

「『ノルソーグ』行きはこの時期混んでいてね…一人以上の席は取れないんだよ…。」

その言葉に優月は内心首を傾げる。

「この人には私が二人に見えるのだろうか？」

そんなことを考えながらどうじょうか考える。

「…えっと…私一人なんで、一人分あればいいんですけど…？」

優月の言葉に駅員は眉をひそめた。

「大人の方は？」

駅員の言葉に今度は優月が眉をひそめ、内心で溜め息をついて またかと心中で呟く。そして、胸ポケットに手を突っ込んだ。

優月の身長は15歳にしてみれば少し低く、よく歳を疑われるのだ。

「いませんよ？ 私これでも 15歳 なんで！」

15歳のところを強調しつつポケットに突っ込んでいた手をゆっくりと取り出した。

その手には黒い手帳が握られておりそれをかすかに開き中の紙の色をちらつかせた、15歳以上の義務教育が完了し大人と認められた者にのみ渡される『マジスバル手帳』という特殊な手帳を掲げた。

「な！？ その歳で白紙とは…………いや、悪かったね。はい、ノルソーク行きの切符だよ。あ、そうそう……あんまり、手帳の中身は見せびらかさないようにした方が良い。色を変える機能があるはずだから、白以外の色にしなさい。良い旅を……気をつけてね。」

優しい駅員さんに見送られてその場を後にした。

この手帳には個人情報などの、全ての情報が記されている。そして、魔力・身分・成績などで色が分かれしており、色が薄くなるごとにレベルが上がっていくという仕組みになっている。この場合白が最高ランクだ。

20歳を超えると稀にだが、白以外の色…金・銀・プラチナなどの色を持つ者もいる。

こういう者はたいてい潜在能力がずば抜けており、戦争などの兵士、または教会などの聖職者など、人を殺したり、助ける仕事がもらえる“カルト”と呼ばれる魔道師の組合に入るものが多い。

そして、そういうものに限って、社会に悪影響を与えると言われたり、力の問題から人間関係がギクシャクしてしまうことがあるのだ。そのため、ある一定の色から上の手帳にはそういうことから持ち主を守るために色をえることの出来る機能がついている。

先ほどの、駅員もこういった事情を知る者としてのアドバイスだったのだ。因みに、色の配分は全世界共通で、現在白から赤まで約1

0色の色が使われている。赤は「ノンマース」と呼ばれ、魔力が全くない者のみに与えられる手帳だ。白は上位3位以内には入っており、1つの国に白以上を持つことの出来る人間はわずか100人いるかないかと言われている。

この手帳は2年ごとに試験をして、年齢とともに変わる魔力の強さに対応できるようになっている。

そして、本当に稀にだが魔力が異常に強く様々な条件に当てはまつた者だけに「現シンウイスト」として黒を持つことを許されることがあるのだ。

おや、そういう話している間に優月の乗り込んだ機関車が走り出したようだ。

まあ、とにかくこいつじて優月の旅は始まった。

・・・

「すんませ～ん！何かいるか～い？」

田舎者丸出しの発音で現れた小太りの女性が売り物らしき物が入ったカートを押しながら回ってきた。どうやら、新手の商売人らしい。優月はチラッと目を向けたもののすぐに反らし、窓の外の流れ行く風景に目を向ける。

『ソラリア・ワール』に来てから外に出たことのない優月にとっては、どれもこれも初めて見る風景といつても過言ではない、そもそも優月には小さい頃…つまり、『ソラリア・ワール』に行く前の記憶など無に等しかった。

そんな優月がこの旅を決意したのにはある理由があった…。それはとても大切で、そして難しいこと…。

優月が、『ソラリア・ワール』を出る決意をしたのは、ほんの1ヶ月ほど前だった。

「ソラリアの学校でたらどうすんの？」

風が通り過ぎるように流れて行く風景をボーッと眺めていた優月の

耳に、学校で一番仲の良かつたリーザンの声が響く。

その時は答える「」ことが出来なかつた。でも、今なら…

心中で呴いて優月は真っ青な空に田を向けた太陽がモロに視界に入り、思わず田を細めて手を田の上に翳した。そして続きを心の中で呴く。

今ならば、答えることが出来る。私は、自分の記憶を…失つてしまつた過去を取り戻す…そして、自分の生きている理由を…役目を見つける…！

優月の呴きは誰にも聞かれることは無かつた。だが、確かな力がこもつていた…それは、優月の瞳のようだに揺るぎ無い決意…そして強い意志…。

しかし、優月がその決意をリーザンに告げることとは無かつた…。リーザンには、この旅について何も告げずに町を出たのだ。出てしまつた今でも後悔はしていない。優月が使つていた部屋は買つたものだから売るのに時間がかかるため、卖るのは諦めて大家さんであるジゼル・ゴートさんに頼んできた。そのため、ジゼルさんに優月のことを聞けば答えてくれるはずだ。

リーザンは優しすぎるからな…。

そつと呴いて、首を振る。

「何をやつてゐんだ優月、これじゃあリーザンに言わすて出てきた意味が無い！」

優月自身に言い聞かせるように、田の心に語りかけようと呴く

いた。隣には補聴器をつけたお年寄りの女性が座っているためとても小さな声で言えば聞こえることはないだろ」と考えての行動だった。

ちらりと隣を見て、相手の反応を窺う。しかしの様子に気付かないところを見て優月はそっと肩の力を抜いた。

そしてまた、窓に視線を戻して思考を巡らせる。

これからはリーザンも私もみんな違う道を歩いていくんだ！

そう自分に言い聞かせていると、隣から声を掛けられた。

「お嬢さん。どうしたんだい？ そんなに真剣な顔をして…。」

突然のことにつつさに優月は横に振り向く。

そこには、先ほどちらりと目を向けたおばあさんが優しい顔でこちらを見ていた。

「え、えっと…」

返答に窮していると、おばあさんは笑みを深くして優しい声で告げた。

「どうやら、何かを耐えている顔をしているねえ。さては、大切なモノを置いてきたのかい？」

随分と鋭いおばあさんの問いに、思わず優月の顔が引き攣る。

「ハハハ！ 図星かい？…なるほど、じゃそれを後悔していると見た。」

まるで、子供が新しい玩具を手渡されたときのように、心底楽しそうにおばあさんがグイッと顔を近づけて聞く。優月は身を少し引いて一瞬の間固まつてからあわてて否定した。

「後悔はしていません！ だって、リーザンは…いえ、なんでもないです。…と、とにかく私は、後悔はしていないんです！」

思わず口に出してしまい、あわてて口を閉じる。

私は、何を言つてゐんだか…。思わず、リーザンに言わなかつ

た理由を見ず知らずのおばあさんに告げてしまつたんだつた。
気をつけないと…こんなに口が軽いときつとの先やつていけない
…。

自分に言い聞かせて反省していると、優月の言動を面白やつに見ていたおばあさんがそつと口を開く。

「素直な娘だねえ…。でも、あんまり自分を追い詰めないようにしてなさい。…後悔しないんなら、そんなに暗い顔をしなさんな…置いてきた者に恥じないようにな。…ピンチと背筋を伸ばしてしつかり前を向きなれ…。もう一度と会わないつもりならおやう前をしつかり見て歩き続けなされ…」

おばあさんはそつこうと優しい笑みを浮かべた。

おばあさんの言葉は優月の心の中に一つの光となつて入ってきた…。とても弱いけど…でも、とても温かい優しい光…。

やつ、だつた…私は、何も言わずにあの町を…出でた…。

「…そつ、ですよ…ね。」

優月が小さな声でおばあさんに答えた。とてもとても小さな声で耳の良い人でも聞こえるかどうかぎりぎりの声だつたにも関わらず、おばあさんは笑みを深めて大きく頷ぐ。

「それでいいんだよ…。といひで、お嬢ちゃんの名前はなんていうんだい?」

突然のこと驚きつつ、名前を答える。

「ゆつ優月です…。あ。」

咄嗟に右手で口元を軽く押されたが、おばあさんはまつせつと聞こえてしまつたよつだ。

やつば…私のバカ…！

内心で自己嫌悪に陥つていると、おばあさんが先ほどと変わらない声で話しかけてきた。

「ゴジキか…変わった名前だが、田舎の出かい？」

「どうやら漢字の名前だとは気付かれなかつたよつて優月は一応安心した。

「えつと、ジール大都市から少し離れたカーリアといつ、小さな町です。」

おばあさんの問ひに素直に答えるとおばあさんはまるで孫の話を聞くかのようにうなずいた。

「そおかい…カーリアかい…」

何かがあつたのか、少し考えるようなまづきになつた。

優月は少し気になつたが、おばあさんの雰囲気に気おされて聞くことは出来なかつた。

それからは、おばあさんの旅の話を聞かせてもらつながら時を過ごした。

・・・

「おんや、そろそろバストジークだねえ。」

おばあさんの言葉に驚き、優月は窓の外に顔を向ける。

バストジークは、ノルソークから考へるとまだもう少し前だが、カーリアから考へると機関車でも3時間はかかるところだ。

もう3時間も…

「時間がたつのつて速い…ですよね…」

顔を外に向けながら言つとおばあさんは笑いながら「そうだねえ」と答えた。

「誰でも何かに集中している時や樂しいときは早く感じるものや。ゴジキはそういう経験ないのかい」

優月はおばあさんの問ひに素直に頷けた。

リーザンと一緒にいる時は時間がたつのが凄く速く感じたっけ…

そんなことを考えながら学校での事を懐かしく思い出していくと、おばあさんの顔が視界入った。

「また、大切なモノについて考えていたね。」

おばあさんは笑っているが少し困ったような顔をしている。

「え、ええ…少し…」

優月が少し戸惑いながら答える。

「…………優しい友達だったのかい？」

おばあさんの言葉に優月は驚き顔を上げた。

おばあさんの田は何処までも優しく…でも、まるで水晶がガラス玉のよう透き通っていた。そんな田にみづめられるとまるで心も見透かされている気がして、優月は居心地が悪そつて田線をそらすために頷きながら俯いた。

その様子におばあさんは一瞬だけ苦笑をしてからすぐには優しい笑顔を浮かべた。

「……………おかげ。…だが、置いてきたんだりうへ巻き込まないために…」

どうやらおばあさんには、優月の心は見透かされているらしい。優月は素直に頷いた。

「相手には相手の夢があった。…そして、相手は友達のためならその夢さえ捨てついて来てしまう、優しい子…だから、それこそ何も告げづに悟られないように置いてきた…そうだろう?」
優月はただただ頷き続ける。

「…………もう一度聞くよ。…コヅキは後悔しているのかい?」

おばあさんの言葉に優月は一瞬震えた。

「……………後悔…？」

「……………後悔は…」

……してない……なんていえない……。だつて、だつてあの町は……

優月は「おまへと田をつづつた。

「後悔しているんだね？」

おばあさんの言葉に優月は微かに頷いた。

たしかに、確かに後悔している……でも……

「……でも、帰りません……」

優月はそつこいつと顔を上げた。

「だつて、リーザンにはリーザンの……やして、私には私の……夢があるから……」

おばあさんはつむぎ云ふると、おばあさんの田が先ほどよりも優しい色に染まつた。

「そつかい……夢かい……」

「はい。……夢、です……」

「だつたら、夢に向かつて歩きなされ。そのために故郷と友・全てを置いて来たのだらう?」

そういうとおばあさんは立ち上がつた。

「おばあさん?」「え?」

不思議そうに見上げる優月におばあさんはもう一度優しく笑つた。

「私はバストジークで降りるよ。……コヅキは大丈夫……夢に向かつて歩きなさい。……お前さんが知りたい事は、この旅の先にある。そして、……なぜ一人になつたのかも……」

「え?」

おばあさんの言葉に優月は田を見開いた。機関車がゆっくりとスピードを落とし始める。

「また合おう、コヅキ」

そうこうとおばあさんは歩き始めた。

「はい、…ありがとうございました」

優月がそうこうとおばあさんは何かを思い出したように振り返った。

「そうそう、ゴジキ。仲間を作るのもいいことだよ」

そう言つておばあさんは片方の田をしづぶつてウインクをした。

「え、あ、はい…？」

優月の反応に面白がり、笑いながらおばあさんは機関車を降りていった。

「…なんだつたんだひつ…。」

呆然とおばあさんを見送りながら呟いた。

でも…正直おばあさんの言葉に救われた…。私は夢のために…私自身のために旅をしよう…リーザンにはリーザンの、私には私の夢がある…。後悔は…少ししてるけど…お互いの、私の夢のためにはこの方が良かつたんだよ…。夢が叶つたそのときに私はリーザンに謝りに行こう!

優月はこうして、自分の心に誓つたのだった。

始まりの町ノルソーグまで、あと少し

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4723n/>

平和な翼

2010年10月28日08時02分発行